

2022(令和4)年上半期の わが国周辺の漁海況の特徴について

目 次

要約ー2022年上半期のポイント	1
1. わが国周辺の海況	3
2. 主要魚介類の水揚量・市況動向	5
3. 魚種別の漁海況・市況	
(1)マイワシ	6
(2)さば類	7
(3)マアジ	7
(4)カツオ	8
(5)ビンナガ	9
(6)スルメイカ	9

2022年7月

一般社団法人 漁業情報サービスセンター
(JAFIC)

要約－2022年上半期のポイント

● わが国周辺の海況

- ・ 日本近海の海面水温は、冬季は親潮系水の南下や寒気の影響で近年(2011～2020年平均)より低めの海域もあったが、春季以降は一部海域を除き、おおむね高めであった。
- ・ 親潮の勢力は、冬季は平成(1993～2017年の平均)並であったが、徐々に弱まり春季は平成より弱めであった。
- ・ 三陸沿岸には、親潮が後退した春季以降も近年より低めの海域が残った。
- ・ 三陸沖～道東沖は黒潮続流北上部から黒潮系暖水が波及したため、海面水温は近年より高めであった。
- ・ この黒潮系暖水の波及は7月現在も続いており、道東海域の海面水温は近年より著しく高めになっている。
- ・ 黒潮は2月の冷水渦切離と5月の冷水渦再結合等により流路は大きく変動したが、大蛇行は今期も継続した。
- ・ 対馬暖流の勢力は、平成より弱めの時期もあったがおおむね平成並み～平成より強めで、山陰を離岸して大和堆南沖を通過する沖合の流路を示すことが多かった。このため海面水温は、流路に近い朝鮮半島沖や大和堆付近では近年より高めであった。

● 主要魚介類の水揚量・市況動向

- ・ JAFIC 調査港における2022年1～5月の調査対象全魚種の累計水揚量は、前年同期比97%の74万トンで、2016年以降では最低となった。平均価格は前年同期比116%の186円/kgであった。
- ・ 魚種別にみても、平均価格が前年同期を上回ったものが多く、燃油価格の高騰やロシアのウクライナ侵攻による水産物貿易の停滞、円安の進行による輸入水産物の価格高騰などの影響が示唆される。

● マイワシ

- ・ マイワシの全国主要港における本年6月末現在の水揚量は31.2万トン(太平洋側27.0万トン、日本海側4.2万トン)に達しており、前年同期(28.1万トン)を約2万トン上回った。
- ・ 犬吠埼付近では、1月から6月上旬まで好調な水揚げが続き、銚子港での1～6月の水揚量は前年を約2万トン上回った。
- ・ 太平洋側では体長16～18cm(2、3歳魚)主体に好漁で、20cm以上(4歳魚)は少なかった。
- ・ 日本海側では隠岐海峡周辺での漁獲が好調であり、境港では3月に約2万トンの水揚げがあった。
- ・ 境港水揚物の体長は18cm前後であった。6月下旬ごろから体長18～20cmの水揚げがあった。

● さば類(マサバ、ゴマサバ)

- ・ さば類の全国主要港における本年6月末現在の水揚量は13.2万トン(太平洋側8.2万トン、東シナ海・日本海側5.0万トン)で、前年同期(21.8万トン)を下回り、2016年以降で最も少なかった。
- ・ 太平洋側では、昨年からの不漁が続き、1～3月のまき網による水揚げがほとんどなかった。3、4月の南下期の水揚げも少なかった。
- ・ 東シナ海・日本海側では、1～3月は対馬海域主体で漁獲され、4～6月に隠岐海峡周辺で漁獲が続

いた。

● マアジ

- ・ マアジの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 4.6 万トン(太平洋側 0.3 万トン、日本海側 4.3 万トン)で、前年同期(3.8 万トン)を上回った。
- ・ 日本海側では、5 月ごろから隠岐海峡周辺で水揚げが続き、境港における 5、6 月の水揚量は前年を上回った。
- ・ 東シナ海側では、5～6 月は中南部海域主体に九州西沖で水揚げが続き、水揚量は前年を上回った。

● カツオ

- ・ 竿釣りによる生鮮カツオの 6 月末現在の 水揚量は累計 1 万 4 千トンで、前年を下回った。
- ・ 4 月までは奄美・沖縄周辺海域が主漁場となり、鹿児島港へ水揚げが集中し、房州勝浦港への水揚げがほとんどなかった。
- ・ 5 月以降、脂の乗った特大魚が伊豆諸島周辺～房総周辺で竿釣り・まき網により漁獲され、房州勝浦港と銚子港に水揚げが集中した。
- ・ 竿釣りによる生鮮カツオの全国月平均価格は前年より高値の 334～443 円/kg で推移した。

● ビンナガ

- ・ 前年より早い 4 月に竿釣りによるビンナガ漁が始まり、5 月は伊豆諸島東方海域でビンナガ中型魚主体となり平均漁獲量が一時増加した。
- ・ 全国の生鮮ビンナガの 6 月末現在の水揚量は 1 万トンで、近年で最低水準となった。
- ・ 全国平均価格は 400 円/kg 以上の高値で推移し、4 月は 608 円/kg で過去 5 年の 1～6 月の月平均単価で最高値となった。

● スルメイカ

- ・ 全国主要港における本年の生鮮スルメイカの水揚量は 6 月末現在 3.8 千トンで、前年同期(3.9 千トン)を 3%下回り、2017～2021 年同期の平均値(5.6 千トン)を 3 割下回った。
- ・ 例年 5～6 月に能登半島沖に主漁場が形成される小型いか釣り船による金沢港の水揚量は、今期は累計 1.3 千トンで、前年同期(1.6 千トン)を 2 割下回り、2017～2021 年同期の平均値(2.2 千トン)を 4 割下回った。
- ・ 中型いか釣り船は、三陸近海の冬季アカイカ漁を 1 月中旬に終漁した後、対馬東沖に漁場移動し、スルメイカ操業を 2 月末まで行った後に休漁し、6 月下旬に能登半島沖で操業を再開した。本年上半期の水揚量は 0.5 千トンで、前年(1.2 千トン)を 6 割下回り、2016～2021 年同期の平均値(1.3 千トン)を 6 割下回った。

1. 2022 年上半期の日本近海の海況

(1) 海域別海況概要

2022 年上半期の海面水温は、冬季は本州南方や日本海は気象の影響、三陸沿岸は親潮系水の南下の影響で、近年(2011~2020 年平均)より低めの海域が広がったが、春季以降は低めの海域は縮小し、三陸沿岸等一部を除き、おおむね高めになった。

(2) 黒潮域・東シナ海

2017 年秋季に始まった黒潮大蛇行は今期も継続し、観測史上最長といわれた1975年に始まった大蛇行の継続期間を超えた。2月上旬に大蛇行南下部から切り離された冷水渦(図 1-1A)が5月上旬に屋久島南東沖で黒潮に再結合する等の変動があったが、5月以降は蛇行が熊野灘沖に停滞した(図 1-2)。これらの影響により、四国沖では黒潮流軸が離岸することが多く、黒潮内側域には冷水渦が見られ、四国沖~紀伊半島沖の海面水温はおおむね近年より低めで経過した。遠州灘~熊野灘(図 1B)の海面水温は、黒潮からの暖水波及の影響で期間を通して近年より高めとなり、特に5月下旬(図 1-2)は、黒潮流軸が熊野灘に接岸し、海面水温は著しく高めになった。沖縄東沖~本州南方沖の海面水温は、気象の影響で近年より低めであったが、6月下旬の梅雨明け後には低めの海域は縮小した。

東シナ海の海面水温は、気象の影響による変動が大きく、黄海周辺と東シナ海北部は期間を通して近年より高めで推移し、東シナ海南部は梅雨明け後には日射等の気象の影響で近年より高めの海域が拡大した。

(3) 親潮域・混合水域

親潮の勢力(100m深で5°C以下)は、前年の秋季は平年(1993~2017年の平均)より弱めであったが、冬季には平年並に戻り、三陸沿岸海域(図 1-③)では、親潮系冷水の南下により、海面水温が近年より低めの海域が拡大し、2月中~3月上旬に最大になり、2月中旬には近年より6~7°C低い海域(図 1-1)もみられた。春季以降は親潮勢力が平年より弱めになったが、三陸沿岸の海面水温は近年より低め状態が続き、6月以降も一部で低めの海域がみられた。

黒潮続流は、常磐以北ではおおむね離岸しながら北東に流れる流路で、春季以降は145°E以東の海域で大きく蛇行した(図 1-2)。冬季は、主に145°E付近の黒潮続流の峰から暖水が波及し(図 1-1C)、三陸沖(図 1-④)や道東沖(図 1-⑤)の海面水温は、期間を通しておおむね近年より高め(図 2)で推移したが、6月は梅雨前線等気象の影響で一時的に近年並となった。春季以降、これらの海域の海面水温は、上記の暖水波及が強まり、6月下旬以降は気温上昇の影響も重なり、2°C前後高めとなった。

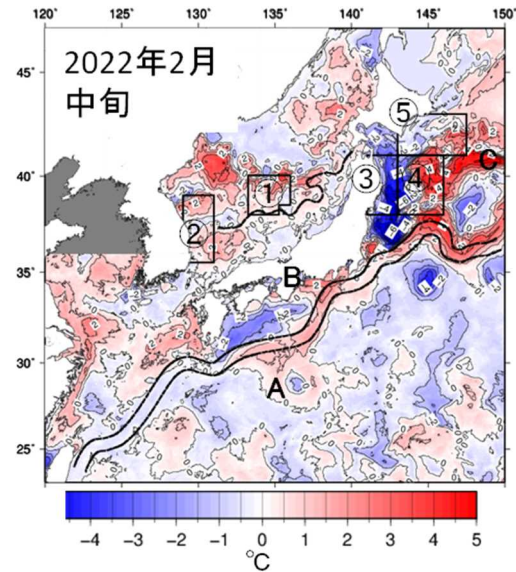


図 1-1. 2022 年 2 月中旬の海面水温の近年差

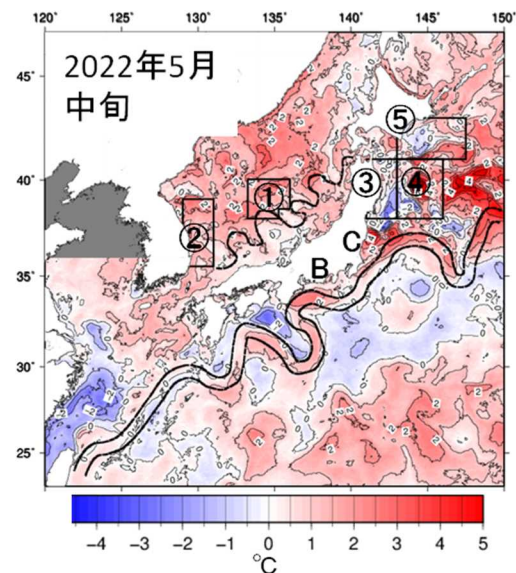


図 1-2. 2022 年 5 月下旬の海面水温の近年差

(4) 日本海

対馬暖流の勢力は、冬季は平年より強めであったが、徐々に弱まり7月現在は平年並みである。対馬暖流の流路は、山陰~北陸ではおおむね離岸し、大

和堆南沖付近を通過した。このため、大和堆海域(図1-①)の海面水温は梅雨前線等気象の影響で近年より低めの時期もあったが、おおむね高めで推移した。東朝鮮暖流域(図1-②)の海面水温は、期間を通して高めで(図2)、6月下旬以降はさらに上昇し、近年より2°C以上高めになった。

日本海北部の海面水温は、冬季には季節風等気象の影響で沿海州付近を中心に、近年より低めの海域が広がったが、春季以降は日射等気象の影響で上昇し広範囲で2~3°C高めになった。

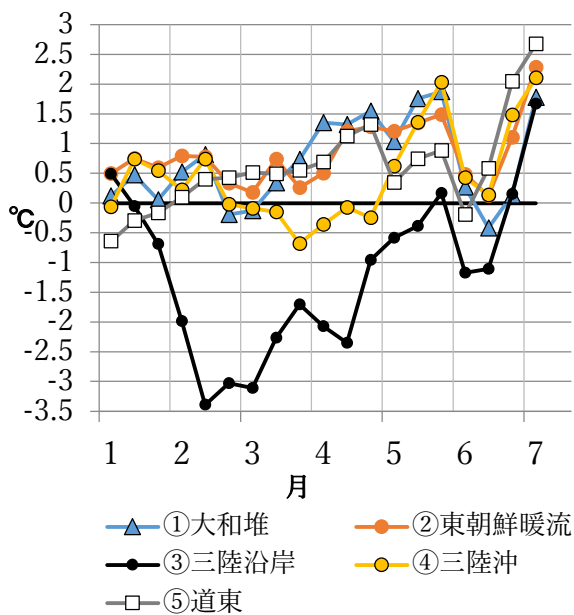


図2. 海域毎の海面水温の近年差(各海域の範囲は図1-①~⑤参照)

(5) 今後(夏季~秋季)の見通し

黒潮大蛇行は継続し、熊野灘沖に停滞する見込みである。四国沖の黒潮内側の冷水渦は徐々に東進し、黒潮は九州~四国沖では徐々に接岸し、遠州灘~熊野灘では接岸傾向が続くと思われる。

各海域の海面水温は、6月下旬以降上昇し近年より高めになったが、7月中旬は低気圧や前線の影響で停滞気味の海域もみられる。しかし、気温も平年より高めで推移する可能性が大きい(気象庁の1ヵ月予報)とされていることから、近年より高めの海域が大半を占めるとと思われる。

特に道東~三陸沖海域は、7月11~14日の気象庁の「NEAR-GOOS 地域リアルタイムデータベースのTESAC報」の観測点(図3)の観測結果から、同

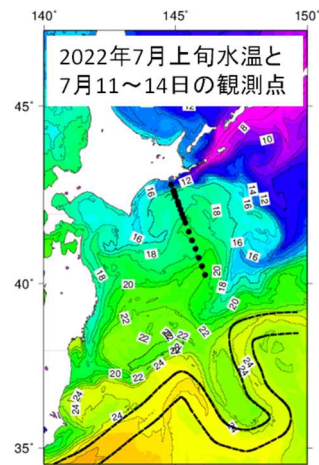


図3. 2022年7月上旬平均海面水温と観測点

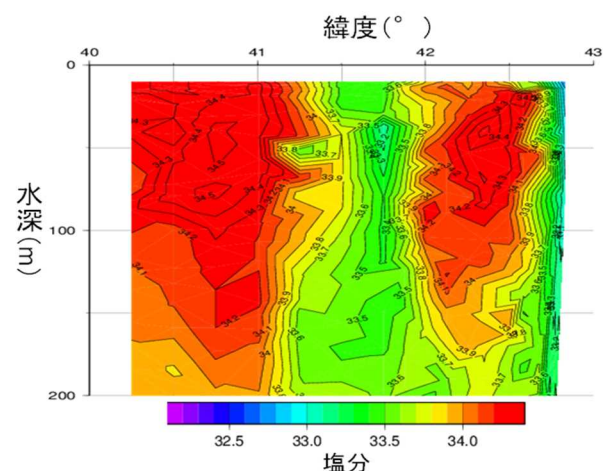


図4. 図3の観測点における塩分断面

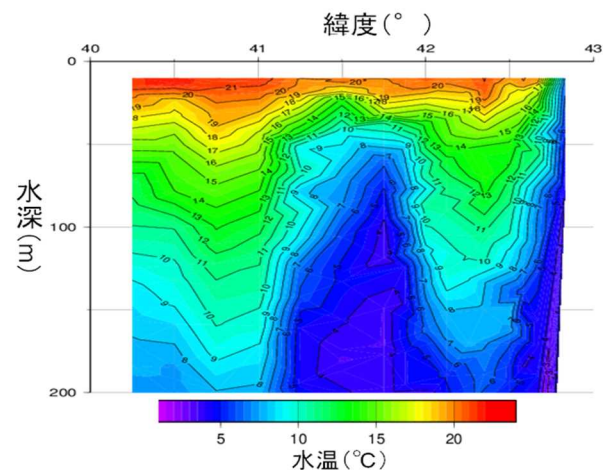


図5. 図3の観測点における水温断面

海域には道東の沿岸に近い42°45'N付近まで高塩分水(34.0以上、図4)が波及していた。この高塩分水の水温は、海面近くでは20°C前後、水深100m以深でも10°C以上を示しており(図5)、黒潮続流から波及してきた黒潮系暖水と考えられる。

この海域の海面水温は、前年の7月も近年より大

幅に高めであったが、前年の場合は表層の低塩分の沿岸親潮水が気象の影響で昇温したものであったため、台風通過により高水温は解消した。しかし、本年7月は、上記のとおり下層まで黒潮系暖水が分布しており、台風が通過しても前年の様な海面水温の急激な低下の可能性は低いと考えられる。

親潮は、道東沿岸では上記の黒潮系暖水により分布が制限されており、主に沖合の第2分枝が南下すると思われる。そのため、現在行われている道東のマイワシまき網の漁場や今後のサンマ漁場は、大きな影響を受けると考えられ、今後の海況に注意が必要である。

2. 主要魚介類の水揚量・市況動向

JAFIC 調査港における2022年1～5月の調査対象全魚種の累計水揚量は74万トンで、前年同期(76万2千トン)の97%と2016年以降では最低となった(図6)。平均価格は186円/kgで、前年同期(160円/kg)の116%であった。なお、水揚量・価格ともに「前年同期並み」とあるのは増減率0～5%の場合を示す。本報告の水揚量と価格はJAFIC「おさかなひろば」による。

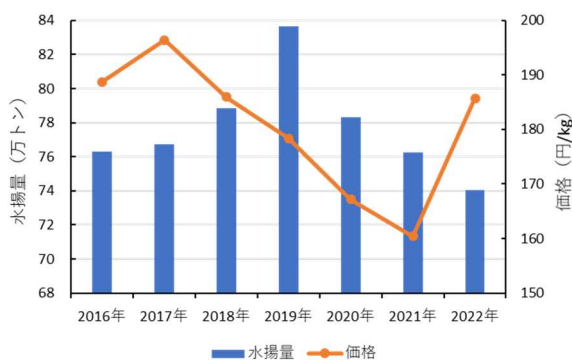


図6. JAFIC 調査港の1～5月累計水揚量と平均価格の推移

主要48魚種の2022年1～5月の魚種別の累計水揚量と平均価格を前年同期と比較した(図7、表1)。水揚量は、マイワシ、かれい類、クロマグロなど23魚種が前年同期を上回り、ヒラメ(天然)、冷凍ミナミマグロの2魚種は前年同期並み、さば類、生鮮カツオ、生鮮スルメイカなど23魚種は前年同期を下回った。平均価格は、ブリ、ギンザケ(養殖)、冷凍メバチの36魚種が前年同期を上回り、マイワシ、生鮮

スルメイカなど6魚種が前年同期並み、カタクチワシ、マアジなど6魚種が前年同期を下回った。

2022年1～5月は、前年と比較すると全般的に高値基調で、平均価格が前年同期を上回った魚種が多かった。産地市場の水揚量が過去5年で最低水準だったことに加え、燃油価格の高騰やロシアのウクライナ侵攻による水産物貿易の停滞、円安の進行による輸入水産物の価格の高騰などが影響したものとみられる。世界的にも水産物の価格が高騰しているなか、今後も市況の動向を注視していく必要があるだろう。

表1. JAFIC 調査港の2022年1～5月の産地魚種別水揚量(トン)と平均価格(円/kg)および前年同期との比較(2021年1～12月の平均価格の昇順に並べ、1,000円/kg以上の魚種を赤字で示した。)

	1～5月				前年比		1～12月
	2022年		2021年		2021年		2021年
	水揚量	価格	水揚量	価格	水揚量	価格	価格
カタクチワシ	4,262.5	36	5,016.9	40	85%	90%	40
マイワシ	265,418.6	40	201,320.2	39	132%	105%	40
スケトウダラ	55,847.4	58	47,647.4	54	117%	108%	47
ウルメイワシ	4,888.0	77	9,733.6	60	50%	129%	56
ホッケ	5,889.3	50	6,925.8	78	85%	65%	66
ニシン	3,799.6	110	1,981.3	81	192%	135%	81
さば類	115,499.6	117	207,753.8	100	56%	117%	110
冷カツオ	65,316.7	233	78,502.5	178	83%	131%	185
ブリ	18,163.0	213	15,766.5	178	115%	120%	185
はたてがい駿付	4,319.3	241	8,334.9	160	52%	151%	195
マダラ	16,962.3	184	15,363.3	173	110%	106%	199
マアジ	40,553.3	177	31,764.0	188	128%	94%	213
生カツオ	11,143.8	344	13,752.4	265	81%	130%	217
かれい類	8,179.7	184	5,516.3	256	148%	72%	283
冷キハダ	17,534.6	398	11,404.1	301	154%	133%	354
ピンナガ	9,152.6	485	13,402.3	310	68%	156%	359
マダイ(天然)	2,898.2	429	1,966.2	433	147%	99%	467
マカジキ	284.9	703	401.9	528	71%	133%	509
ヒラマサ	421.4	563	372.8	574	113%	98%	516
マダイ(養殖)	207.5	826	183.7	580	113%	142%	605
ギンザケ(養殖)	2,509.1	792	2,896.2	635	87%	125%	609
サンマ	10.8	399	1.6	240	676%	166%	621
生スルメイカ	1,979.7	576	2,228.0	605	89%	95%	622
さわら類	608.8	764	1,598.6	691	38%	111%	652
冷スルメイカ	516.6	877	1,180.9	654	44%	134%	677
サザエ	93.9	966	110.1	666	85%	145%	677
たご類	1,426.1	762	1,892.1	515	75%	148%	696
ヤリイカ	1,105.0	752	1,383.1	773	80%	97%	703
生キハダ	4,387.7	850	3,985.5	751	110%	113%	766
ハマチ(養殖)	53.2	1,113	113.6	674	47%	165%	783
ヒラメ(天然)	646.4	892	619.3	777	104%	115%	805
あなご類	231.8	779	188.3	707	123%	110%	814
冷メバチ	8,589.2	1,097	10,195.4	765	84%	143%	833
メジマグロ(ヨコワ)	179.7	1,126	147.1	923	122%	122%	873
生メバチ	965.2	1,247	1,551.8	989	62%	126%	1,058
メカジキ	920.5	1,281	1,234.8	1,106	75%	116%	1,138
ヒラメ(養殖)	16.3	1,284	22.5	1,157	72%	111%	1,379
キンメダイ	776.7	1,431	695.7	1,294	112%	111%	1,402
アカムツ(バドグロ)	156.1	1,333	142.6	1,257	109%	106%	1,471
あまだい類	86.9	2,172	74.3	1,795	117%	121%	1,853
冷ミナミマグロ	1,498.1	2,291	1,560.0	1,759	96%	130%	1,870
クロマグロ	1,549.5	2,632	814.2	2,531	190%	104%	1,898
キンキ(キチジ)	532.5	1,810	292.9	2,242	182%	81%	2,622
あわび類	14.6	9,846	10.6	6,555	138%	150%	3,738
イセエビ	24.4	5,514	21.3	4,500	114%	123%	4,537
トラフグ	96.8	3,808	63.2	4,492	153%	85%	4,546
ウルメアヒ	3.4	7,322	3.8	5,531	89%	132%	5,400
うに類(刺身)	37.0	7,950	68.5	6,607	54%	120%	10,786

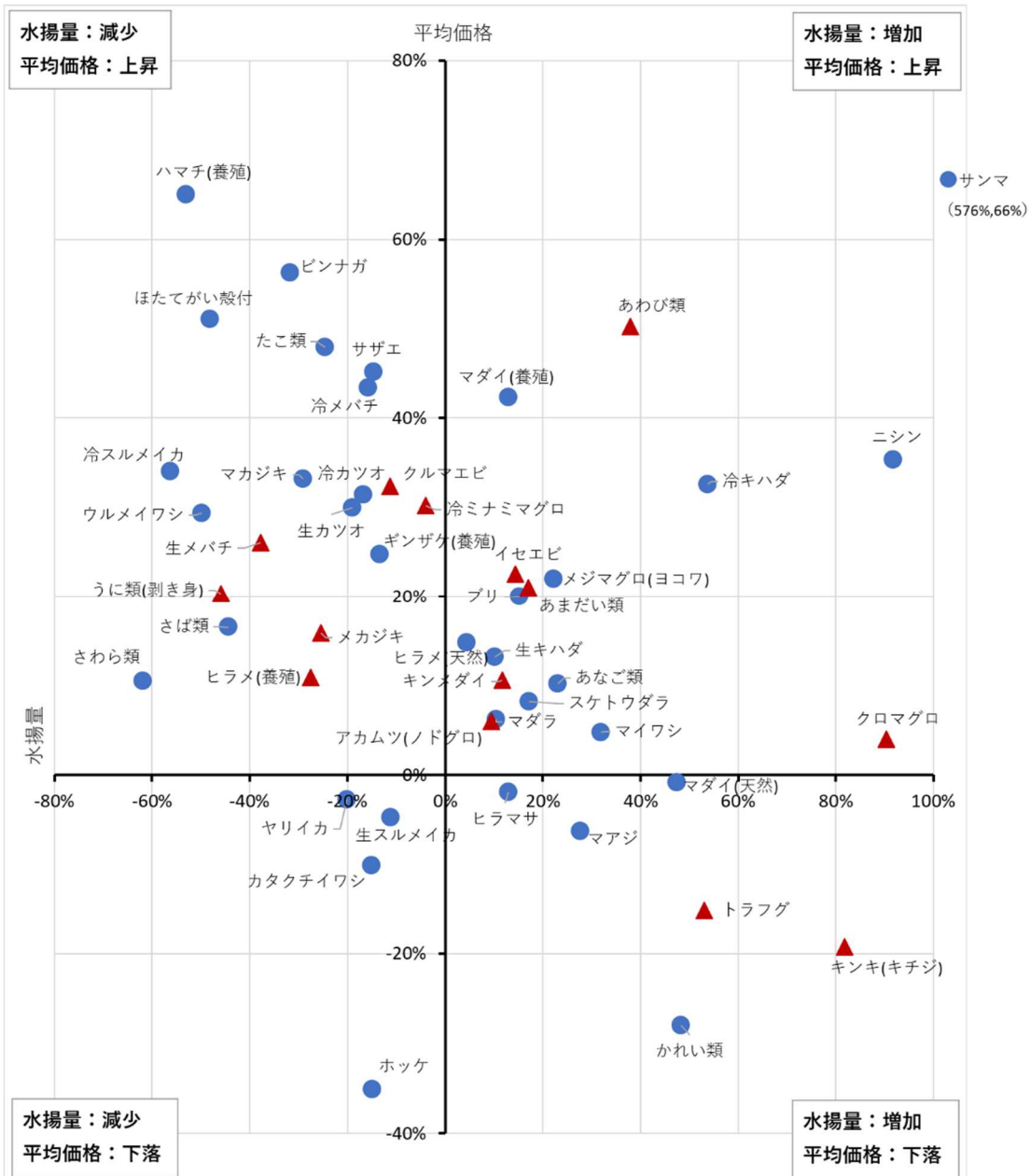


図 7. 主要 48 魚種の水揚量と平均価格の比較(2022 年 1~5 月/2021 年 1~5 月)横軸と縦軸の目盛に記載した%は、2021 年同期比の増減率を示す。▲は 2021 年 1~12 月の平均価格が 1,000 円/kg 以上、●はそれ未満の魚種を示す。目盛の範囲外にある魚種については、水揚量と価格の増減率をカッコ内に示す。

3. 魚種別の漁海況・市況

(1) マイワシ

マイワシの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 31.2 万トン(太平洋側 27.0 万トン、日本海側 4.2 万トン)に達しており、前年同期(28.1 万トン)を約 2 万トン上回った(図 8)。太平洋側では体長 16~18cm(2、3 歳魚)主体に好漁で、20cm 以上(4 歳魚)は少なかった。犬吠埼付近では、1 月~6 月上旬に好調な水揚げが続き、銚子港での 1~6 月の水揚

量は前年を約 2 万トン上回った。道東沖の棒受網では 6 月上中旬に体長 20cm 以上も混じった。夏以降は資源量が豊富な体長 16~18cm (2、3 歳魚)主体に、道東沖で水揚げが続くと考えられる。漁期終盤には 14~16cm(1 歳魚)も水揚げされる。日本海側では隠岐海峡周辺での漁獲が好調であり、境港では 3 月に約 2 万トンの水揚げがあった。水揚物の体長は 18cm 前後であった。6 月下旬ごろから体長 18~20cm のサイズの水揚げがあった。価格は全国的に 2021 年並みの低水準であった(図 9)。

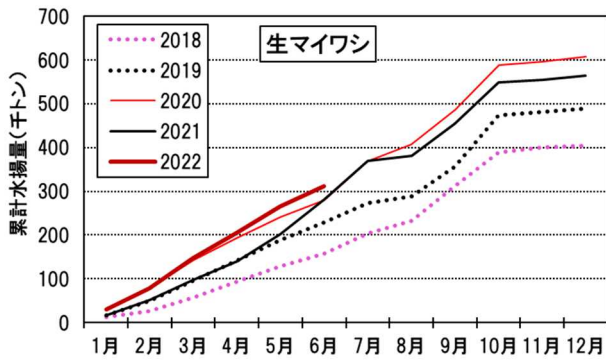


図 8. 2018～2022 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別水揚量の推移

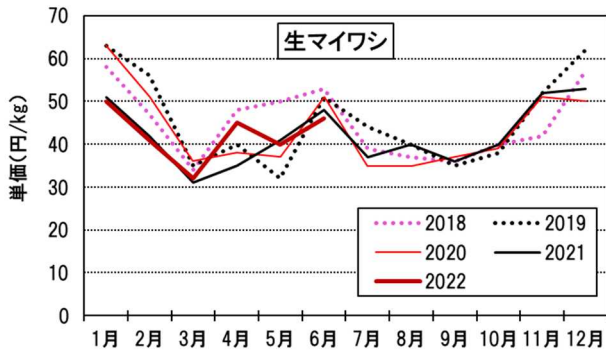


図 9. 2018～2022 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別単価の推移

◎房総～常磐海域で春先に水揚げされたマイワシの太り具合について

本年 4～5 月に房総～常磐海域で水揚げされたマイワシは前年の同体長のマイワシと比較して、体重が 10～20g 少なかった(図 10)。最近、太平洋側のマイワシの成長の遅れが指摘されているが、本年はさらに太りが悪くなっていることが示唆される。なお、日本海側のマイワシには、これまでのところ太平洋側のような成長の低下は認められない。

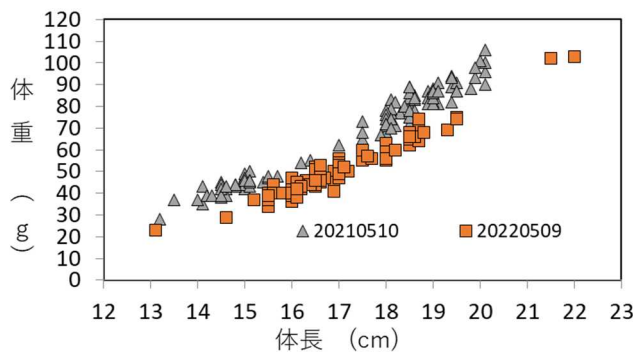


図 10. 2021 年、2022 年 5 月の鮫子水揚げマイワシの体長体重関係の比較

(2) さば類(マサバ、ゴマサバ)

さば類の全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 13.2 万トン(太平洋側 8.2 万トン、東シナ海・日本海側 5.0 万トン)で、前年同期(21.8 万トン)を大きく下回り、2016 年以降で最も少なかった(図 11)。太平洋側では、昨年からの不漁が続き、1～3 月のまき網による水揚げがほとんどなかった。3、4 月の南下期の水揚げも少なく、奈屋浦港や北浦港では前年を下回った。5、6 月の北上期には石巻港でまとまった水揚げがあったが、これは沿岸を北上した群が定置網や底曳網で漁獲されたものである。今後は、道東まき網でわずかに混じり、11 月ごろからは八戸沖～石巻沖にまき網漁場が形成されると考えられる。東シナ海・日本海側では、1～3 月に対馬海域主体で漁獲され、4～6 月に隠岐海峡周辺で漁獲が続いた。4～6 月の境港の水揚量は前年を大きく上回った。価格は全国的に近年では高水準である(図 12)。

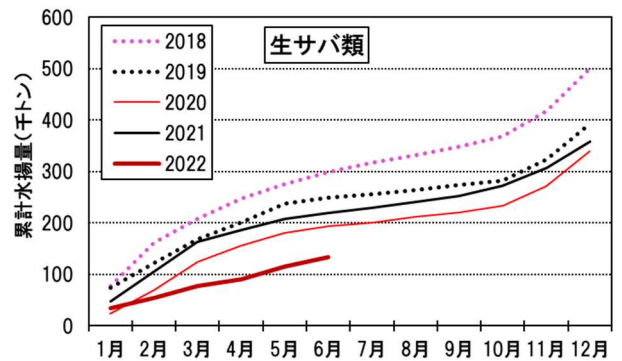


図 11. 2018～2022 年の全国主要港における生鮮さば類の月別水揚量の推移

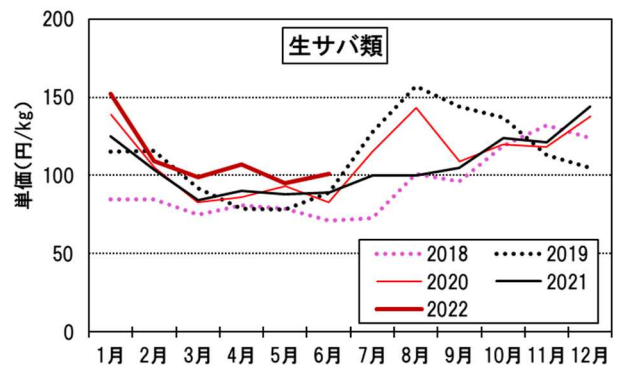


図 12. 2018～2022 年の全国主要港における生鮮さば類の月別単価の推移

(3) マアジ

マアジの全国主要港における本年 6 月末現在の水揚量は 4.6 万トン(太平洋側 0.3 万トン、日本海側

4.3 万トン)で、前年同期(3.8 万トン)を上回った(図 13)。日本海側では、5 月ごろから隠岐海峡周辺で漁獲が続き、境港における 5、6 月の水揚量は前年を上回った。東シナ海側では、5~6 月は中南部海域主体に九州西沖で漁獲が続き、水揚量は前年を上回った。価格は 1~4 月は低水準で推移していたが、5、6 月は上向き、2021 年を上回った(図 14)。

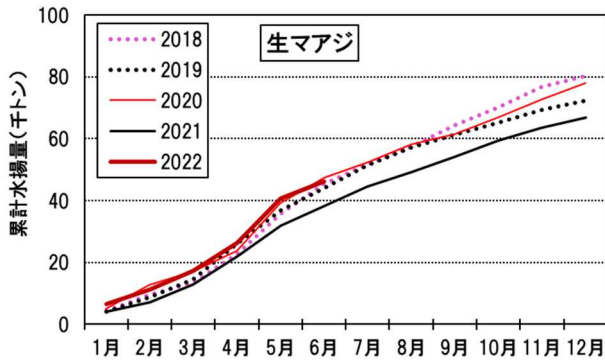


図 13. 2018~2022 年の全国主要港における生鮮マアジの月別水揚量の推移

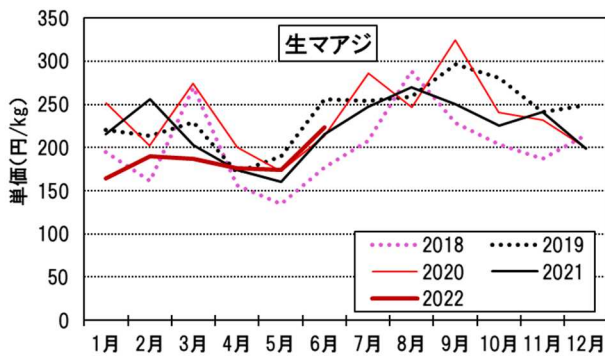


図 14. 2018~2022 年の全国主要港における生鮮マアジの月別単価の推移

(4)カツオ

近海竿釣り船は例年どおり 2 月上旬から出漁し、和歌山県はるか南方沖~小笠原諸島周辺で漁場を探索したが、沖合で群れが薄く、4 月まで奄美・沖縄周辺海域が主漁場となった(図 15)。このため、鹿児島港に水揚げが集中し、1~4 月の房州勝浦港への水揚げは 114.5 トンで極端に少なく(前年比 5%)過去最低水準となった。魚体はカツオ特大・大が主体で、中・小・極小などが混じった。5 月から竿釣り漁場は遠州灘沖~房総沖へ移動し(図 15)、カツオ中・大主体に漁獲し、まき網も 5 月から同海域で例年並みの漁獲があり、房州勝浦港へ水揚げが集中した。例年より魚体が大きい、脂の乗りが良く、小売店で価

格が手頃であったため、一般消費者に好まれた。6 月は、伊豆諸島周辺でカツオ大主体、房総沖から常磐沖の黒潮続流以南の広い海域と、148~150° E を北上する黒潮続流周辺でカツオ中を漁獲し(図 15)、房州勝浦港と気仙沼港に水揚げした。6 月の生鮮カツオ(釣)の全国水揚量は 5.8 千トンで、前年(5.5 千トン)を上回ったが、1~6 月の累計は 1 万 4 千トンで前年同期(1 万 5 千トン)をやや下回った(図 16)。まき網による生鮮カツオの全国水揚量は、6 月は 1.1 千トンで伸び悩み、1~6 月の累計は前年同期を大幅に下回った(図 18)。価格は、竿釣りは前年より高値の 334~443 円/kg で推移し、まき網は 151~322 円/kg で徐々に上昇し、5、6 月は前年より高値となった(図 17、19)。

東北沿岸の海面水温は、親潮の第 1 分枝の影響で、近年比でやや低温となっており、暖水を好む大型のカツオは、今後は東北はるか沖の黒潮続流および黒潮系暖水波及域に北上するとみられる。現在少量見られる小型のカツオは、秋には 20°C 以下の

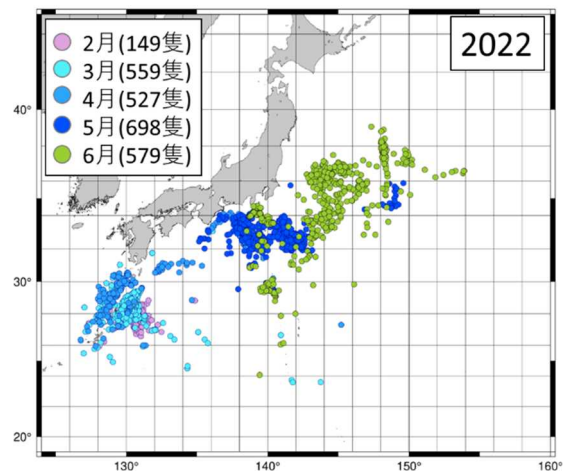


図 15. 2022 年 6 月の近海竿釣り船の漁場(情報収集海域全体)

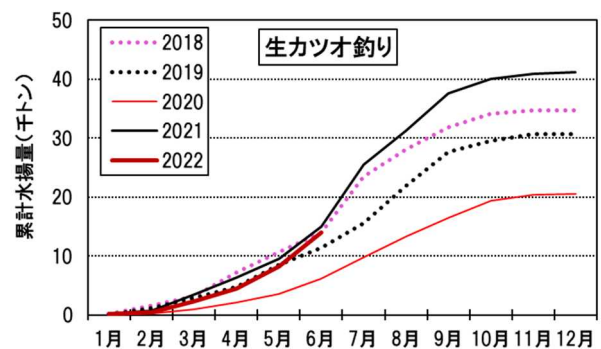


図 16. 2018~2022 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別累計水揚量の推移

海域にも分布する群れで、沿岸では小型カツオの漁場が形成される可能性がある。水揚量が少ない中、気仙沼港ではキロ単価が 1,000 円を超える日もあるが、群れが薄い本年は、燃油費高騰の中、漁業者にとって漁場の選択が難しい年と言える。

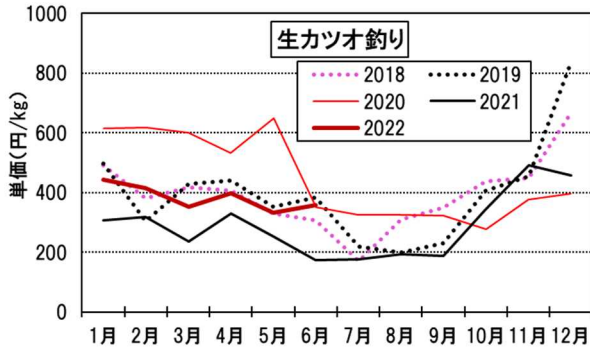


図 17. 2018～2022 年の全国主要港における生鮮カツオ(釣)の月別単価の推移

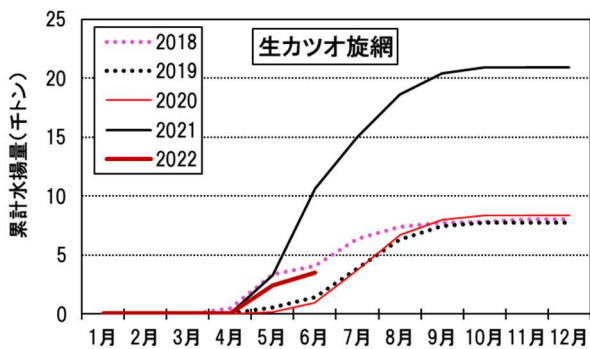


図 18. 2018～2022 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別累計水揚量の推移

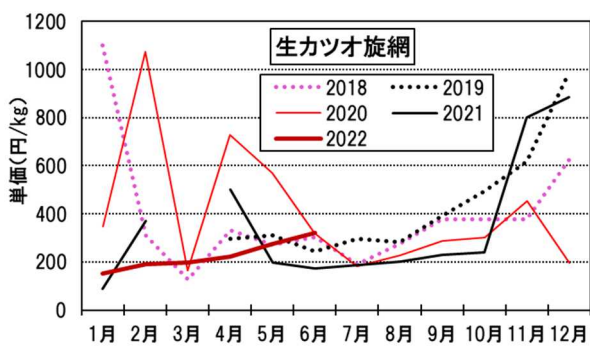


図 19. 2018～2022 年の全国主要港における生鮮カツオ(まき網)の月別単価の推移

(5)ビンナガ

竿釣りでは、前年より早い 4 月に熊野灘沿岸の黒潮系暖水が波及したとみられる海域で、大型魚主体に漁獲が始まった。5 月は、黒潮が伊豆諸島から房

総の比較的沿岸に寄り、北東へ流れたが、黒潮外側にあたる伊豆諸島東方海域でビンナガ中型魚主体となり、1 日 1 隻あたりの漁獲量は増加した。その後ビンナガ漁場は長く続かず、6 月に入ってすぐにカツオ主体に切り替わり、本年の竿釣りによるビンナガの漁獲はほぼ終了した。

全国主要港における本年 6 月までの水揚量は 1 万トンで、前年比 56%、好漁だった 2020 年比 30%、過去 5 年平均比 47%にとどまった(図 20)。生鮮ビンナガの全国平均価格は、400 円/kg 以上の高値で推移し、3 月以降は過去 5 年で最も高値となった。4 月は 608 円/kg で過去 5 年の 1～6 月の月平均単価で最高値となった(図 21)。沿岸での水揚げも少なく、本年の生鮮ビンナガの水揚量は過去 5 年間で最低となる見込みだ。

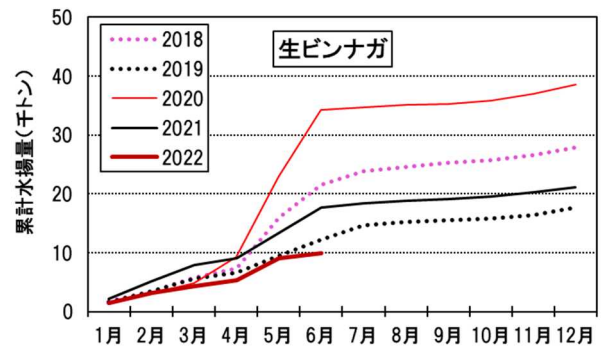


図 20. 2018～2022 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別累計水揚量の推移

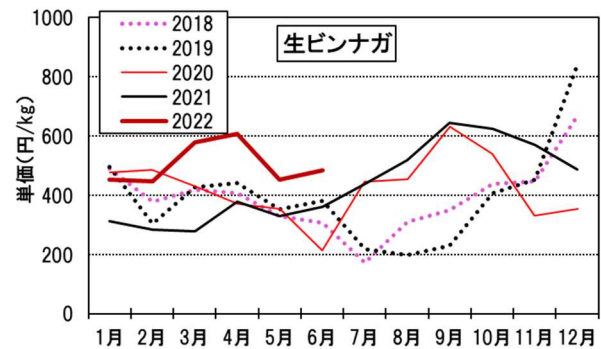


図 21. 2018～2022 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別単価の推移

(6)スルメイカ

【生鮮】生鮮スルメイカの全国主要港における本年の 6 月末現在の水揚量は 3.8 千トンで、過去最低であった前年同期(3.9 千トン)を 3%下回り、2017～2021 年同期の平均値(5.6 千トン)を 3 割下回った(図

22)。冬季(1~4月)には、日本海を産卵のために南下する冬季発生系群が山陰~対馬東~吉岐で小型いか釣り船により漁獲されたほか、富山湾の定置網にもまとまって入網し、近年並みの漁獲がみられた。本年1~6月の生鮮スルメイカの価格は、概ね昨年並みの高値で推移した(図23)。

日本海に分布するスルメイカの主群である秋季発生系群は、九州西岸~山陰沖で秋季に産卵し、例年5~6月に日本海を北上しながら成長し、生後半年で能登半島沿岸の小型いか釣り船の漁獲対象となる。この時期の水揚げの主体となる金沢港の6月の入港隻数は例年より4~5割少ない80隻前後で、例年の盛漁期には1日に発泡2~3万箱の水揚げが続くが、今期は1万箱/日の水揚げが6日間あったのみであった。今期の金沢港の累計水揚量は1.3千トンで、前年同期(1.6千トン)を2割下回り、2017~2021年同期の平均値(2.2千トン)を4割下回った。この背景には、小型いか釣り船の漁場に小型鯨類やマグロが多く出現し、いか釣りの糸が絡み操業に支障をきたしたため、6月下旬に1週間以上休む船も多かったことがある。

太平洋側の6月の水揚げは、三陸の底曳網が徐々に好調で、下北半島の小型いか釣り船による昼いか漁も出足が好調であった。今後、太平洋側の冬季発生系群の漁獲が期待できる。

【冷凍】中型いか釣り船(冷凍)の日本海のスルメイカ漁の漁期は5月~翌年の2月末で、3~4月が禁漁期間である。不漁が長く続いたことや燃油高騰の影響を受け、出漁しても採算割れになることから、近年は、出漁を6月に遅らせ、終漁を12月前半とする船もみられ、漁期が短縮傾向にある。本年当初、中型いか釣り船は三陸近海の冬季アカイカ漁に出漁したが、群れが薄く低調だったため、1月下旬には日本海の対馬東沖に漁場を変更し、小型いか釣り船に混じってスルメイカ漁を2月末まで行なった。6月後半に漁獲を再開し、能登半島沖合で1日1隻当たり0.8~2.4トンと、この時期としてはまとまった漁獲がみられた。本年上半期の冷凍スルメイカの水揚量は0.5千トンで、前年(1.2千トン)を6割下回り、2016~2021年同期の平均値(1.3千トン)を6割下回った(図24)。本年1~6月の冷凍スルメイカの価格は、不漁を受け2020年に次ぐ高値で推移した(図25)。

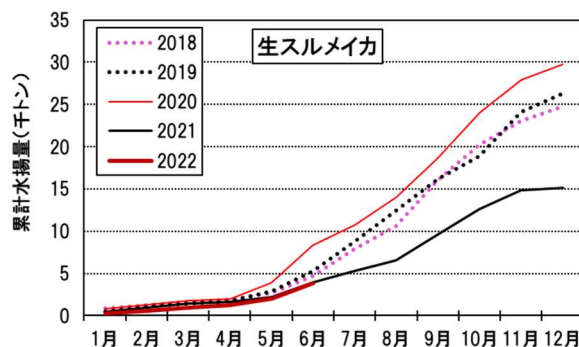


図22. 2018~2022年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別累計水揚量の推移

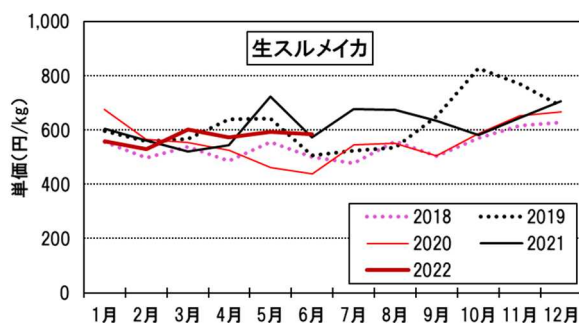


図23. 2018~2022年の全国主要港における生鮮スルメイカの月別単価の推移

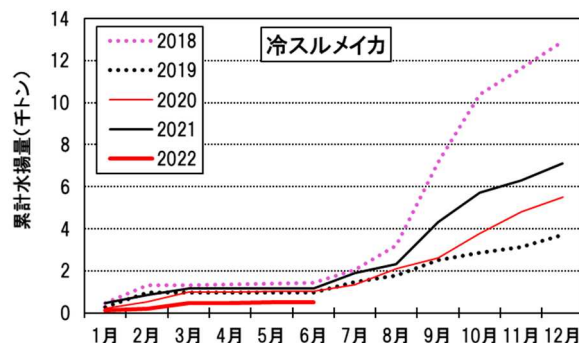


図24. 2018~2022年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別累計水揚量の推移

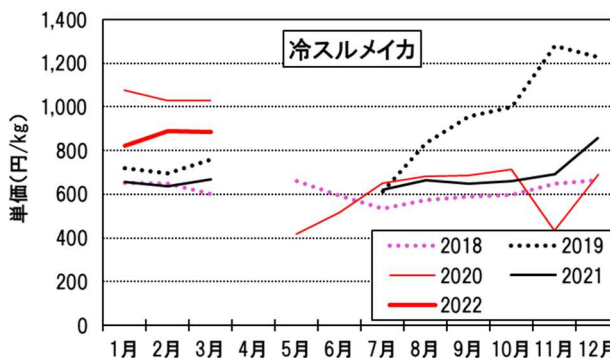


図25. 2018~2022年の全国主要港における冷凍スルメイカの月別単価の推移